

2010年夏期 第2回洞天調査の概要—嵩山・華山・終南山

土屋昌明

2009年夏期につづいて第2回調査の日程・参加者・所見を記す。所見はごく簡単に気がついたことや憶測を記すにとどめ、詳細と議論は別稿および今後の検討にゆずりたい。

【日程】

- 8月25日(水) 東京→北京→鄭州→登封 羽田8:30→北京11:20、関空9:30→北京11:50、北京14:40→鄭州16:10 鄭州から車で登封まで移動(約70分)、登封泊。
- 26日(木) 嵩山①少室関、永泰寺、「唐永泰寺碑」、少林寺、夜に横手氏合流、登封泊
- 27日(金) 嵩山②啓母関、啓母石、嵩陽書院、法王寺、太室山登山、登封泊
- 28日(土) 嵩山③登封南郊外、禹洞、石淙、崇唐観、登封泊
- 29日(日) 嵩山④少室山登山、登封城隍廟、横手氏帰国、登封泊
- 30日(月) 嵩山⑤中岳廟、華蓋峰、登封→華山(車6時間) 華陰泊
- 31日(火) 華山①大上方登山 華陰泊
- 1日(水) 華山②華山登山、華陰→西安(新幹線) 西安泊
- 2日(木) 西安①三原県城隍廟、天齊坑、薬王山 西安泊
- 3日(金) 西安②終南山、玄都壇、老子墓、西樓観台、西安泊
- 4日(土) 西安11:15→北京12:55 三聯書店などで資料収集
- 5日(日) 北京17:25→羽田21:45

【参加者】大形・鈴木・土屋・横手

【所見】

8月25日 北京空港で羽田からのメンバー(鈴木・土屋)と大阪からのメンバー(大形)が合流。鄭州空港から車で登封に移動。

26日 登封はこじんまりした街で、県城からみると、西北から太室山が怒濤のように東へとつらなっていく、おなじ西北から南へと屏風のように少室山がそびえているように見える。県城からみて北側の太室山と西側の少室山のあいだに、平地が入りくんだギャラリーのように西北へとのびており、県城からその方向に行く道にそって少室関や啓母関・永泰寺があり、少林寺はその奥にあ

る。太室山と少室山には数多くの高峰があり、それらがV字型にはす向かいにならないでいる。太室山と少室山は一群の山地のなかの二つの峰というわけで

図1 登封県城に北面して太室山の峰が東西にならんでおり、西北から南に少室山の峰がならんでいる。

© Googlemap



はない。

少室関は少室山にむかって建っている関である。少室山が高く聳える方向ではなく、峰と峰が切れて山の向こうを見通せるような方向に立っているようである。後漢の元初五年から延光二年(118～123)ころの建設といわれている。浮き彫りで車馬の出行や馬や象のサーカス・動物などの図が描かれているとされる。ここは現地の文物管理局の許可がないと保護用の建屋内部に入れないため、今回は調査できなかった。

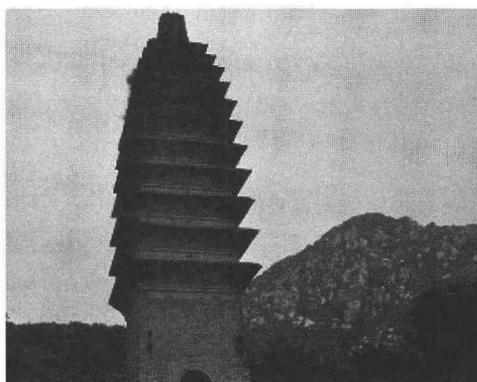
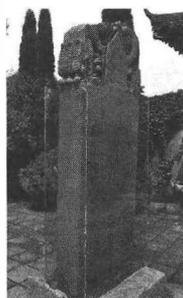
永泰寺は、少林寺にいく街道の途中にある。もと明練寺といい、創建は北魏

図2 少室関の建屋の背景は少室山の峰々。



図3 左、永泰寺碑の現状。

図4 右、永泰寺塔と背後の太室山。



の正光三年(522)。現存するのは清代の建築。積靖彰撰、荀望書の「唐永泰寺碑」がある。書法も立派で保存も良いが、碑面にガラスがはってあり、光線が反射してみにくい。寺の背後の高台に唐代の永泰寺塔があり、太室山を背景にして非常に美しい。

少林寺については有名なところなので所見を割愛する。

27日 啓母関は啓母廟の神道関であるが、廟は残存していない。関は建屋に覆われていて、ここも管理局の許可がないと接近できないが、折しも有力者ご一行があり、それに便乗して観察した。後漢の延光二年(123)に潁川太守の朱寵なる者が建てたという。少室関と同様な浮き彫りがあるが、禹の神話が描かれているのが重要である。上部に銘文があり、禹の治水が語られている。啓は禹の子であるから、啓母は禹の妻である。『漢書』武帝紀にはすでに太室祠と啓母石が言及されている。禹が熊に変身したのをみてしまった妻が石となり、それが北側からぱっくり割れて啓が生まれた、という伝説が『淮南子』の説として顔師古注に引かれている。

この啓母の姿とされる石は、関の背後の太室山の麓にある。3階建てのビルほどもある巨大な岩で、あきらかに山上から墜落してきたものと思われるが、現地は太室山の峰から相当の距離があり、一体なにがおこったら山上からこのような巨大な岩が飛来できるのか、まことに不思議である。あるいは氷河期に山下から氷河によって運ばれたのかもしれない。岩の北側が切断されたかのよ

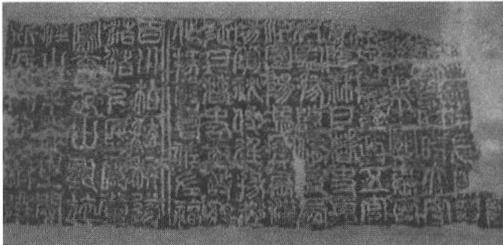
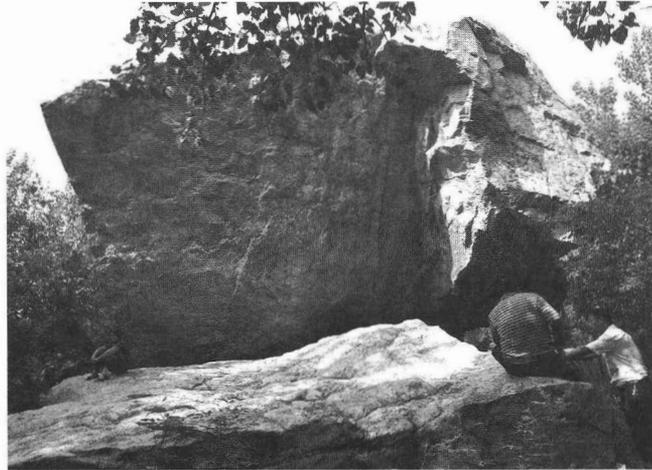


図5 啓母関の銘文拓本

図6 左中、啓母石。登封城隍廟に掲出されていた写真。

図7 下、現在は周囲に植林されている。

図8 左下、啓母石の背後からみた太室山



うに見事にぱっくり割れているのも氷河期の現象であろう。上述のような神話が仮託されるのもむべなるかなと思われた。

そうはいつても、この地域に禹の神話が古くから流通していたからこそ、このような不思議な岩に神話が仮託されたのであろう。この地域には禹に関わる伝説が多く、ほかにも告成鎮の南にある禹州という地名や禹洞という洞窟の存在（後述）などがある。禹は黄河の治水の神であるから、河南の靈峰嵩山と関連するのである。

禹の伝説と中国の中央としての嵩山への崇敬は、周の中原経営において結びついていると考えられる。『逸周書』「度邑解」は、洛邑に成周をつくったのは「天室」に依るためだといっている。「王が云った、わたしは南に三塗のかなたを望み、北には嶽鄙のかなたを望み、振り向いては黄河のかなたを目にし、正面には伊水や洛水の眺めが広がって、天室からも遠くない」とある。この「天室」は天を祀る祭場であり、太室山・少室山と関連があると考えられるべきであろう*¹。ここにいう「三塗」は地名だが、塗氏に関わるもので、禹の妻の姓と同じである。

本研究にとって禹の神話は、洞天思想の由来の問題に関わる可能性がある。「靈宝五符」が林屋洞天でみいだされたという『太上靈宝五符序』の伝承は、禹の神話に接続されており、「靈宝五符」を名山の洞窟に蔵したのは禹だとしているからである。この『靈宝五符序』の伝承には呉王と洞庭湖が登場するが、孔子も登場するのであり、それは必ずしも江南地域に限った伝承だとすることはできない*²。この禹の伝説は讖緯書にもみられ、それには「洞天」の語も使われている。黄河・伊水・洛水から出たという河図洛書の伝承が、讖緯思想を経由して道教思想に流入していると思われる。

さて話を实地調査にもどそう。つぎにおとずれた嵩陽書院は北宋の書院であり、現在の建築は清代である。ここはもと北魏の太和八年（484）に創建の嵩陽寺であった。このころは北魏が洛陽の宗教施設開発に力を注ぎ始めたころで、大同で築いた雲岡にならって伊水のふちに龍門石窟を創建した。龍門の古陽洞にある書道のいわゆる龍門二十品などは、このころから作られた。その意味では、北魏王朝と嵩山の霊場をむすびつける役割を担わされた寺だったと想像される。さらに本研究にとって重要なのは、ここが唐代に嵩陽観とされ、この地域の中心的な道観になったことである。それは院内に建っている「大唐嵩陽観紀聖徳感応頌碑」という巨大な碑の存在からもわかる。この碑は高さ10メートルあまり、幅2メートルあまり、厚さ1メートルあまりもある。玄宗のときの宰相たる李林甫撰、徐浩書の隸書碑である。内容は、玄宗が道士の孫太沖に金丹を作らせたことをいう。崇唐観の項で述べるように、嵩陽観は嵩山での修道の拠点でもある。

法王寺は、少林寺よりの太室山の麓にある。ここは洛陽の白馬寺につぐ後漢

注1…小南一郎「帝から天へ—天の思想の形成」『東方宗教』第116号、2010年11月、1～21ページ。

注2…マックス・カルタンマルク『太上靈宝五符序』に関する若干の考察』『東方学』第65輯、1983年。

創建の寺である。2010年7月に「圓仁」という署名のある石板が発表されて話題になった。我々も道のついでに行ってみたが、若い僧に石板の所在を尋ねたところ、裏山にあるとのことなので、寺内の見学も早々に裏山に登ってみた。そこには唐代の塔が数基残っており、そのうちのいずれかに当該石板は関わっていると思われるが、けっきょくみいだせなかった^{＊3}。

太室山へは登頂をめざして登ったが、体力不足のせいで地元民に聞いていた時間をかなりオーバーする状況となり、九合目あたりで日暮れが近づき、危険なので登頂せずに引き返さざるをえなかった。予定では太室山をぬけて東側の中岳廟に降りるのに6時間だと聞いていたが、かなわなかった。参道はすべて石畳か石段であり、途中に水などの売店もあるが、相当の体力と気力が必要である。九合目までに廟が4カ所存在したが、いずれにも道士らしき人物は住持していないようであった。

28日 登封南郊外の告成鎮周辺まで車で調査に行った。当該地域出身の運転手だったが、目的地までは道に迷うことがあった。

禹洞は徐庄郷の禹洞河村北にある。潁水の支流の北岸が台地状になっており、台地に隣接して採石場があり、丘陵がすべてえぐられて石灰石が採られていた。おそらく台地はカルスト地形なのであろう。そこで、川の南側から川を歩いて渡ろうとしたが、その準備がなかったため、採石場を車をつきることにした。採石場の奥で車を降り、河岸段丘にはえる林の中を抜けて川沿いにいった。川の水量は多くなかったが、川原は相当に広く、増水した場合は台地まで水かさが増えるような形跡があった。しばらく行くと林の台の上に廟があった。そこが禹洞の入口である。

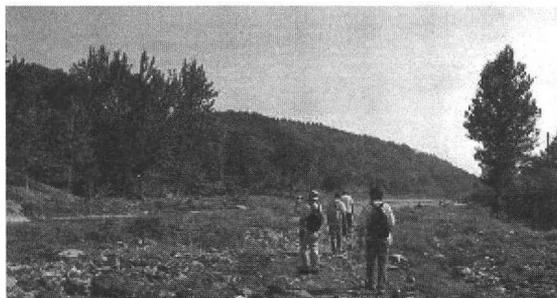


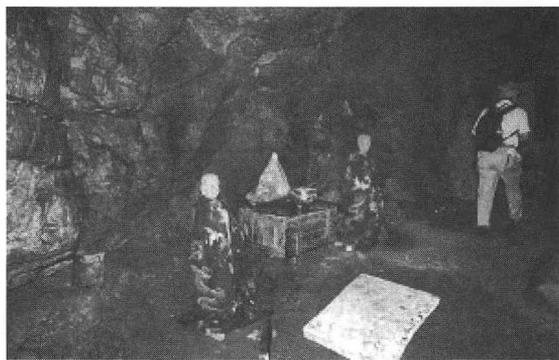
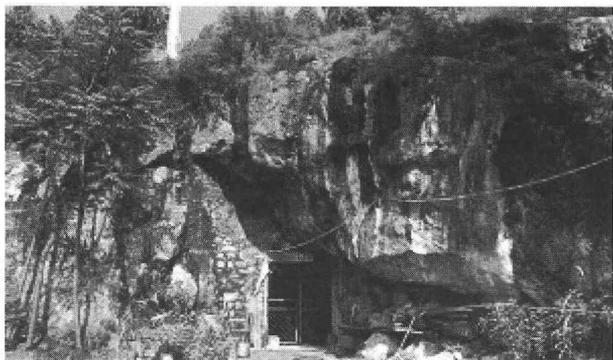
図9 左、禹洞がある台地(左手)。

図10 右、禹洞の前、左手前が洞窟の入口。

管理人の置き手紙が地べたに置いてあるところをみると、日中に参詣者がいるのであろう。昼食を食べてきたらしい管理人が帰ってきて、洞窟の鍵をあけた。入口近くの壁面左上部に三教合一の石刻像があった。「儒釈道教使人尊」という銘刻があるが、時代は不明。その作風および洞窟内に道光四年(1824)の石香炉があるとのことなので、この石刻もおそらく清代のものと想像される。

注3 …のちに、國學院大学でおこなわれた当該史料の検討会のレジュメにより、その石板は法王寺の石壁にはめこまれたものと、鐘楼内に格納されたものの2枚が存在することがわかった。2011年1月23日に國學院で検討会がおこなわれた。詳しくは鈴木靖民『円仁と石刻の史料学—法王寺釈迦舍利蔵誌』高志書院、2011年11月。私もこの史料の文章上の問題について言及したことがある。土屋「新出舍利蔵誌によせて」藤樹社『月刊書道界』2011年1月号。

図11 左、禹洞の入口。
図12 右、禹洞内部。

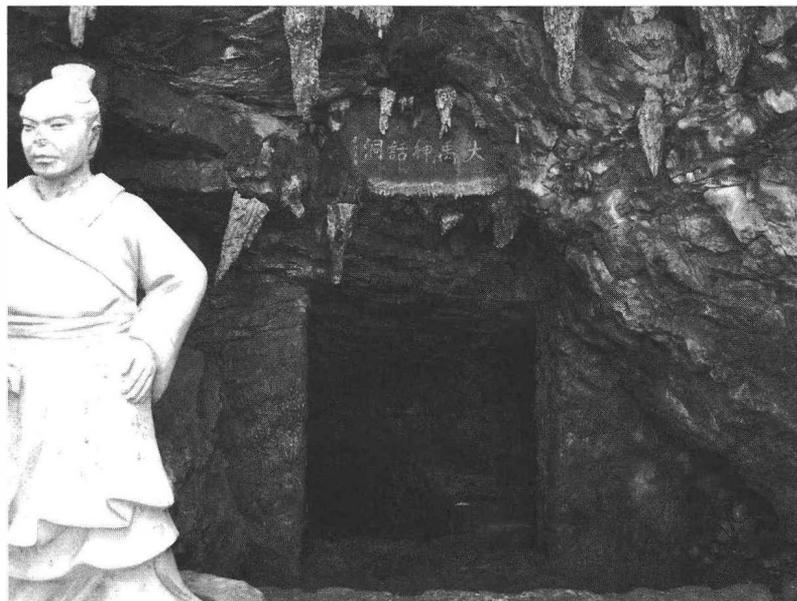


奥にはかなり広い空間があり、舞台が作ってあってみせものなどをやるそうである。さらに奥に洞窟が続いているが、危険なので封鎖したとのこと。

廟の管理人の話によって、川にむかったこの洞窟以外に、裏山にもう一つ洞窟が存在することがわかった。裏山にまわってみると、観光開発をしたらしく、入口が整備された形跡があったが、いまでは荒地となっていた。しかし洞窟の入口はぽっかりあいており、放置された状態であった。十数メートルも進むと、洞内はまったく光が射し込まず、足下は斜めに下っており、しかも水が浸みている。危険を犯してまで観光開発された場所をそれ以上調査する必要はないと判断した。

地元管理人の話では、禹洞は中で分かれ道がいくつもあって迷路のようになっており、奥はどこまであるか誰も知らない、とのことである。一つ想定されるのは、川に面した洞窟と裏山の洞窟が中で貫通していると思われることである。また、地元民の話によると、あるときこの川で洪水がおり、水がこの洞窟に流れ込んだところ、数キロ離れた瀬水に流れ出たという。

図13 裏山の禹洞の入口。



私見では、ここで考慮しておくべきことは、禹洞のような石灰岩の洞窟の場合、洞窟は水の流れにそって延々と続く場合があり得るという点である。たとえば、フランスのミロルダ洞窟は、深さが1610メートルで世界一、長さは12000メートルもある*4。そうすると、禹洞のように川の近くにある洞窟は、川からの水を引き込むことで余分な水を排出することができる。治水とは堤防を作ることだと我々は先入観で考えやすいが、支流を作るのも治水であるから、自然の洞窟を洪水の際の支流として加工したのかもしれない。それがこの地域における禹の伝説と結びつき、この洞窟は禹洞とよばれたとも考えられる。

つぎに訪れた石淙は、禹洞からそれほど遠くない潁水の支流の溪谷である。川は東から西に流れる溪流であるが、高低差はあまりない。南側の山上にセメント工場があるよして、そこからの排水と騒音がこの美しい溪谷を台無しにしている。唐の則天武后がここで水遊びをするために、溪谷の石に加工したようである。薛曜書の摩崖題記「夏日游石淙詩并序」が北壁に刻されており、今でもはっきりみえる。南壁にやはり薛曜書「秋日宴石淙序」が刻されているよしたが、南岸壁には接近できず、望遠レンズで当該摩崖を撮影したが文字は確認できない。

注4 エリック・ジッリ (Eric Gill) 『洞窟探検入門』 本多力訳、白水社クセジュ文庫、2003年、14頁。

図14 石淙、左手奥に摩崖題記がみえる。



注5…則天武后が嵩山で舉行した金籙齋の投龍筒で使用された金筒が発見されている。その議論については、神塚淑子「則天武后期の道教」（吉川忠夫編『唐代の宗教』京都：朋友書店、2000年）を参照のこと。

注6…この碑の拓本が2009年11月「道教の美術」展で大阪市立美術館に出品されたとき、本研究で来日してそれをみたジョン・ラガウエイが、本碑の研究の道教史上の重要性を指摘し、啓発を受けた。

則天武后は洛陽を神都としており、明堂をはじめとする宗教施設を建設し、葉法善などの道士を使って嵩山で金籙齋を舉行している*⁵。則天武后時代の嵩山の宗教活動について、今回は調査できなかったが、今後「昇仙太子碑」を軸にして検討を加えてみたいと考えている*⁶。

崇唐観は、太室山に登る山道の麓にあった。太室山のピークから左右に伸びた峰々に背後を囲まれるようにして南面しており、峰はつきたっているものの、ふもとになだらかな裾があって、峰のすぐ下の裾に建てられているような景観である。東側の太室山の連峰は大きく断絶している地点があり、その断絶した崖の間から東の空までみえ、その断絶の間を登る月が崇唐観から眺められるよしである。崇唐観の東わきには、太室山の東よりの山から大量の湧水が流れ込んで溪流となって流れている。この溪流は断絶した崖の奥で大きな滝になっているらしい。県城から上がると、崇唐観あたりまでは山道の傾斜が比較的緩やかであり、だらだらした坂が続いている。山上での修道には、麓から物資を運び上げる必要があるから、崇唐観は県城から物資を馬車などで運んできてストックする役割もあったと想像される。つまり崇唐観は太室山の山中修道の拠点たるにふさわしい場所にあった。現在でも、山中に勤める観光業者の宿泊地となっている。



図15 崇唐観は手前下側。地形図では、無極洞のある南に伸びた峰とむきあった谷にある。

唐代の「王適碑」によると、崇唐観は潘師正が嵩陽観に住持したときに唐の高宗の勅命で建設された。『茅山志』によれば、嶺上にべつに精思院を建てて、そこに潘師正をすまわせたという。

崇唐観には「潘師正碑」および唐代の道教造像があるが、普段は太室山の山上の服務員のために宿舎とされているとのことで、立ち入ることができなかった。彼らの退勤時間を狙って再度訪れてみたが、残念ながら管理者をみいだすことはできず、調査できなかった。

なお「王適碑」によれば、崇唐観が竣工した翌年には、さらに県城に近い嵩陽観（前述）の北側の山林を通る遊歩道を作って崇唐観と接続するようにし、このあたりの山林を逍遙谷とよび、嵩陽観からの門を仙遊門、崇唐観への門を

尋真門とよんだという。現在では嵩陽書院の入口から右に迂回して溪流沿いにある遊歩道があり、我々もそこを歩いて崇唐観まで登った。1時間ほどの非常に美しい景観の山道だが、だらだらと上り坂が続き、相当にくたびれる道である。

29日 少室山は一日で歩くルートがあるが、すでに連日の調査で疲労しており、少室山を南北に抜けるルートを歩くのはあきらめ、南側から三皇塞まで登ることにした。少室山は南北に峰がならんでおり、アプローチとしては北の少林寺から登るか、南の三皇行宮から登るか、南東の蓮花寺から登るか、この三つのルートがある。少室山の北には昔から少林寺があり、仏教勢力の強いエリアである。したがって、隋唐の道観があったのは少室山の比較的南側よりであったろう。たとえば、司馬承禎の高弟たる焦真静が住持した道観はどこにあったのだろうか。少室山の西は断崖絶壁が続き、道観を建設するには不向きである。

図 16 少室山の西側

図 17 三皇塞禅院との背後の峰の間隙



南の三皇塞近辺は比較的登りやすく、現に登山道には小規模な廟が存在する。しかし、高い峰の西側であり、東からの太陽光線をうけにくい。道教は修道において東からの太陽光線を重視するので、日の出の太陽光線を浴びられない西側に道観を作っても、道士が住持する重要な道観とはされなかつただろう。ただし、三皇塞では連なる峰が断絶して東側が眺められるような間隙があり、現在そこに寺が建設中である。

この間隙部分は、未確認だが、おそらく東側麓の少室関から眺められた少室山の間隙部分と通じているような位置関係ではないかと想像され（図2を参照のこと）、後述する太室山の南に見える関状の丘陵と対照になっているように思われる。あるいは古来、宗教的に重要な場所だったのかもしれない。残念ながら建設現場となっていて、詳しく調査することができなかつた。崇唐観が太室山の峰のふもとの登山しやすい場所にあったことから類推すれば、少室山の南東の蓮花寺あたりが、県城からだらだらした上り坂の平地が続く地形であり、道観を作るにも訪れるにもより適しているのではないかと考えられる。

注7…王琦注『李太白全集』卷九、508頁。この焦煉師が司馬承禎の高弟で焦真静という女道士であることは、土屋「唐代の詩人と道教—李白を中心に—」『筑波中国文化論叢』第23号、筑波大学中国文学研究室、27～53頁、2004年を参照。

太室山にいた潘師正は司馬承禎の師ということであるが、その司馬承禎の高弟で焦真静という女道士が少室山にいたようである。李白の「贈嵩山焦煉師并序」序文につぎのようにある*7。

嵩山に神人焦煉師なる者有り、何許の婦人なるかを知らざるなり。又た齊梁の時に生まると云うも、其の年貌は五六十と称すべし。常に胎息して穀を絶ち、少室の廬に居る。遊行すること飛ぶが若く、万里に倏忽たり。世に或いは其の東海に入り、蓬萊に登り、竟に能く其の往を測る莫しとも伝う。余は道を少室を訪ね、尽く三十六峰に登り、風を聞いて寄する有り、翰を灑って遥かに贈らん。

冒頭に「嵩山」といい、つぎに「少室の廬に居る」といっているから、この焦煉師は少室山にいた。李白は「道を少室を訪ね、尽く三十六峰に登り」といっており、少室山で修行をした。この李白の詩に登場する焦煉師は、司馬承禎の二高弟のうちの一人たる焦真静であるから、「少室の廬」とは道観のことだと思われる。ここには李白をはじめ、王維などの著名な詩人だけでなく、王屋山にある「玉真公主受道靈壇照応記碑」によれば、玄宗の妹の玉真公主も天宝の改元にちなんで来訪している。したがって、宗教的にも建築的にも崇唐観に匹敵するような道観だったと想像される。しかし現在、少室山には古い道観は残っていないばかりか、その位置はもちろん、そういうものが存在したという伝承すら残っていないようである。焦真静の道観の位置を少室山から南東のふもとだと仮定すると、李白は当該詩のなかで「潁水に酌み」といっており、潁水は少室山からみると南側にあるから、道観が少室山の南東にあれば、北に少室山を仰ぎ、南に潁水に酌むという形勢になるので、この仮定に有利である。現在の潁水は、县城から東南へかなり行った告成鎮の方にあり、嵩山の麓を流れているわけではない。おそらく唐代も潁水はそれほど少室山に近かったわけではなかろう。李白がいつているのは、則天武后が遊んだ石淙（前述）のことをいつているのかもしれない。そうすると「潁水に酌み」には、仙人が空中を飛行する含意があり、俗人なら一日の行程をひとつ飛びだというのであろう。

さて、本日午後には、登封の城隍廟を調査した。ここには石碑が多く収蔵されている。本研究において特に重要なのは「王徴碑」である。城隍廟の庭にほかの碑とともに立っているが、保存は完好で文字が確認できた。

30日 午前中に太室山の東側にある中岳廟およびその後山である黄蓋峰を調査。中岳廟には明代の刻になる「五岳真形図」と北魏の「中岳嵩高山靈廟碑」が立っている。両者とも保存は完好である。ガラス張りになっていて見にくいですが、レプリカが並べてあり、参考になる。黄蓋峰は太室山の山並みからやや

ずれて、孤立した小峰である。中岳廟の関から遠望すると、それほど高いようには感じないが、関から廟を歩いて峰まで歩くと1時間程度はかかり、登り



図18 華蓋峰から見た太室山。中央の隙の向こう側ふもとに崇唐観があるような位置関係だと思われる。少室山は華蓋峰からほとんど見えず、太室山の南縁の彼方に少室山の南側の峰が見える。



図19 華蓋峰から見た登封县城の方角（つまり西南方向）。太室山の地脈が続いて二つの小さな峰が並列しており、あたかも中岳廟に向かう（城内に入る）関の形を成している。この関の位置から西を見れば、おそらく少室山が正面に見えると想像される。

が体力的にも厳しい。

午後から車で華山まで移動、高速道路で約6時間かかった。華陰にある華山金融賓館で、研究協力者の樊光春氏（陝西省社会科学院宗教研究所）と合流。樊氏に持参を願っていた終南山の「金可記碑」拓本を調査。詳しくは別稿に譲る。

31日 玉泉院を調査の後、樊光春氏と張方氏（陝西省社会科学院宗教研究所）および一般参詣者二名とともに、華山の山塊から北に位置する大上方に登り、山上の道観と修行者の生活を調査。この登りは時に垂直に近いような崖を鎖やハシゴ頼りによじ登る状況である。この登山道は、宋代に整備されたことが途中の磨崖碑によってわかるが、立てこもるにはうってつけの山である*⁸。鎖やハシゴのかかる場所は、上から妨害されたら登攀するのはまず無理である。また、山上近くに、相当の角度で上に抜ける雷神洞という洞窟があり（人工と思われる）、ハシゴがかかっているのに登れるが、ハシゴがなかったら登攀は不可能のように思われた。またこの洞窟の出口は狭く、ドアが作ってあって上

注8…国共内戦の時に国民党の兵士がここに立てこもり、道士を労役に使ったという。

からシャットアウトが可能である。山上には一軒の家屋があり、真武観という。右手平地の奥には野菜が作れる程度の畑と泉がある。この真武観には曹道士（女性）がもう一人の道士（女性）と住持している。電気は最近引かれたとのことで、穀物は麓から別の道士が担いで上がる。家屋の内部にはとくに祭祀空間はないようで、祭祀と修行はさらに山上の洞窟（人工）でおこなう。この山上には金仙観とよばれる道観の廃墟がある。切り出した石を積み重ねた壁や階段が残っており、規模は大きくないが、相当に立派な建築物が存在したようである。金仙観という名称は、唐の玄宗の妹である金仙公主に関連させられており、金仙公主がここで修行したという。磨崖刻石があるが、古いものとは思われない。華山の北麓にある玉泉院は金仙公主の道観に由来し、現在もここに当地の道教協会が置かれており、大上方はここが管理している。大上方の金仙観の背後にかなり長文の磨崖碑を見いだした。当地が金仙公主と関連させられるようになった事情については、あらためて検討が必要である。大上方の調査については本誌所載の大形論文を参照のこと。

9月1日 華山に登る。ロープウェイで北峰まで行き、そのあと西峰をめざしたが、途中で天候が悪化してきたこと、登山道が一部閉鎖されていて、予想以上に時間がかかったことなどから、西峰に至らずに下山した。詳しくは本誌所載の大形論文を参照のこと。下山後、華陰から西安に移動した。

2日 西安市内から車で三原县城隍廟と天齊坑、午後に薬王山をそれぞれ調査した。

図 20

図 21

三原县城隍廟には隋開皇三年（583）老君像がある（城隍廟は三原県博物館

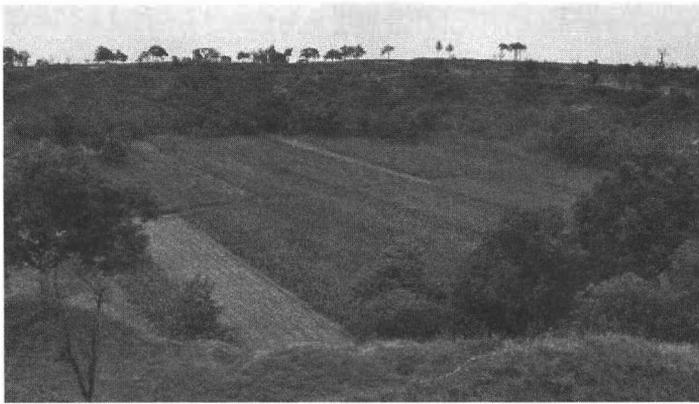


となっている)。保存は完好ですばらしい。ガラスケースに収納されていたため実測はできなかったが、高さは約90センチ、基座の四面に供養人の線刻画と発願文がある。顔立ちは仏像に似ているが、ヒゲに特徴がある(図20.21)。樊光春氏はこれらの特徴を三点にまとめている。①北朝時代に浮き彫り式だった道教像が座像になったが、発願文や線刻の人物像といった浮き彫り式の形式を残存している。②ヒゲは胡人の特徴を備えており、供養人が西来少数民族だったと思わせる。③基本的な造形は唐代に継承される*9。

その午後、三原県城から車で郊外に向かい、農村で道を聞きながら天井岸村をめざした。三原県の西北郊外の嵯峨郷天井岸村に天齊坑がある。これは巨大な人工のへこみである。現地は西に高い峰(嵯峨山)を望む台地にあり、へこみは北側が崩れているが、他の方角はきれいに崖状になっており、一見して人工のクレーターであることが見て取れる。底は畑になっていて歩くことはでき

注9…樊光春『西北道教史』北京：商務印書館、2010年、673頁。

図22 天齊坑、北側から
図23 北側から底へ降りる



なかった。

秦建明氏らの調査報告によれば*10、直径は約260メートル、深さは26メートルで、漢代の天齊祠の跡地である。しかも漢代の長安城の中心軸上に位置し、南の終南山子午谷にまで直線で結ぶことができるという(この秦建明氏らの報告時には、子午谷に存在する玄都壇は発見されていなかった。後述)。また、天齊坑の東数百メートルには中央と東西南北に十字形に均等に配置した基壇(五方基壇)が残っている。明らかに人工の基壇であり、この基壇の上にはおそらく建築物があったのであろう。

これらは、漢代の長安城の南北の軸線にあわせた建築物であり、長安城を天人相関の思想の下に設計するためのものである。近年、宇野隆夫氏らによるGPS調査によって、この中軸ラインが南北75キロにわたって実在し、渭水をはさんで漢の高祖の長陵と長安城を南北対称的に配置しているなど、漢代の長安城関連の建築が象徴的な造営理念を持っていることが指摘されている*11。そのプロジェクトのメンバーである黄曉芬氏は、クレーター状の地形を「東井」、その東500メートルに存在する5つの基壇が東西南北中央に十字に配置され

注10…秦建明・張在明ほか「陝西发现以长安城为中心的西汉南北向超长建筑基线」『文物』1995年第3期。

注11…黄曉芬「漢長安城建設における南北の中軸ラインとその象徴性」『史学雑誌』第115編第11号、2006年および「漢帝都長安の都市計画と造営理念」『古代文化』Ⅱ、第61巻、2009年。宇野隆夫編著『ユーラシア古代都市・集落の歴史空間を読む』勉誠出版、2010年3月。



図24 天斎坑の東にある中央の基壇。

図25 中央の基壇の上から見た西の基壇（小道の彼方）。林のあるところが天井岸村。その向こうに天斎坑がある。北と南の基壇は崩れていて目視できない。

た五方基壇を「五星」、渭水を「天漢」（天の川）、子午谷口を「天闕」と考え、「五星聚東井」という王者の受命符を表現しているとみている。天斎坑と玄都壇を対照させて考えると、ここを北として地にへこみを作り、南には天に聳える形で玄都壇を作ったことになり、陰陽の対照を企図しているのであろう。玄都壇のある地は、後述するように、終南山の洞天福地と思われる。したがって、これは漢代の遺跡と洞天福地との関連を示唆するものでもある。ただし、玄都壇は天斎坑と同時に作られたとは思われず、また漢代に作られたかについては検証が必要だと思われる。

午後から耀県薬王山を調査した。薬王山所蔵の北朝の道教造像を調査する予定だったが、紹介者が不在で造像に近づけず、また時間も少なかったため、保管の現状を認識したにとどまった。これとはべつに、薬王廟の背後の崖には、普段は隠してあるが、じつは洞窟が存在するを見いだした。つまり薬王廟はこの洞窟を祀る格好で建てられているのであり、この洞窟こそ薬王山の核心的位置にあるようである。現地の管理者によると、内部は耀県に近い銅川まで続いているという。祭礼の際のお香の煙が銅川の出口まで伝わるとのことである。地図でみると、銅川までは17キロほどあり、にわかには信じられない話である。現在、内部は封鎖されて入れなかった。

3日 終南山近辺、玄都壇（天壇）と老子墓と西楼観台を調査した。終南山については洞天の同定として問題がある。というのは、司馬承禎によれば、第三大洞天西城山は、「太玄惣真之天」、上宰王君（王遠）が統治していることになっているが、司馬承禎は所在を未詳としつつ、『登真隱訣』を引いて終南太一山と言っている。これを太白山とみると、第十一小洞天に「太白山洞、玄德洞天」「仙人張季連、連終南山」とあり、前後のつじつまが合わない。したがって、第三大洞天は第十一小洞天が連続している終南山のことだと思われるのである。ではなぜ司馬承禎ははっきり終南山と自分で言わずに、陶弘景の口を借りたのだろうか。司馬承禎がいわゆる「終南の捷徑」を嫌悪していたことは有名であるが、七世紀末から八世紀はじめの長安における楼観台の勢力を嫌って、故意に

このような言い方をしたのかもしれない。

玄都壇は、終南山の峰が関の形に左右対称になった子午谷を入ったところに

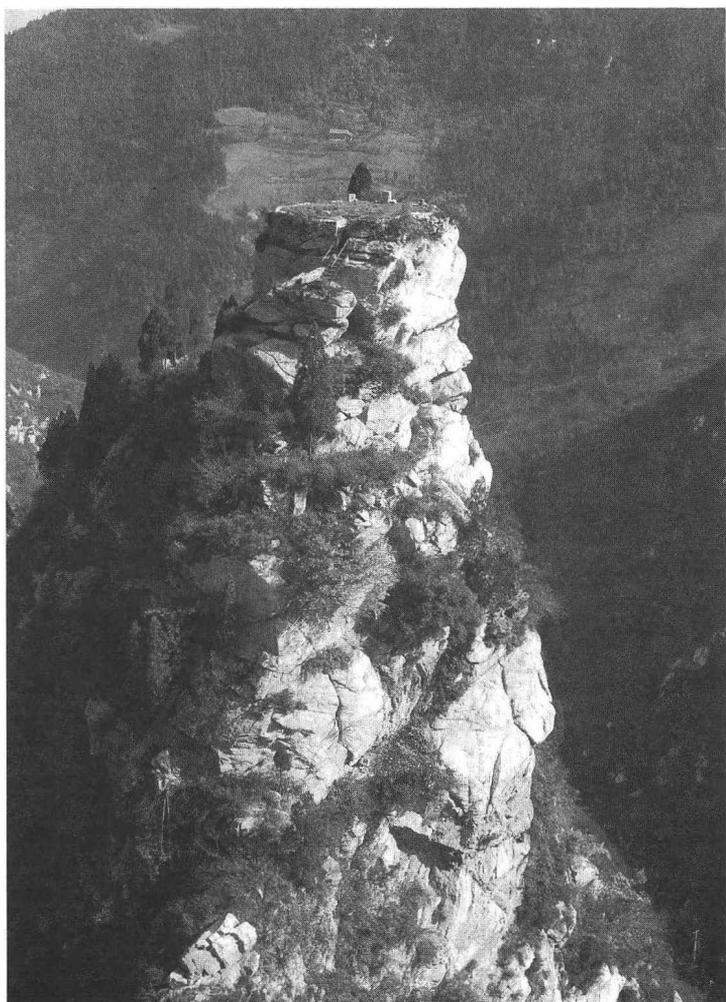
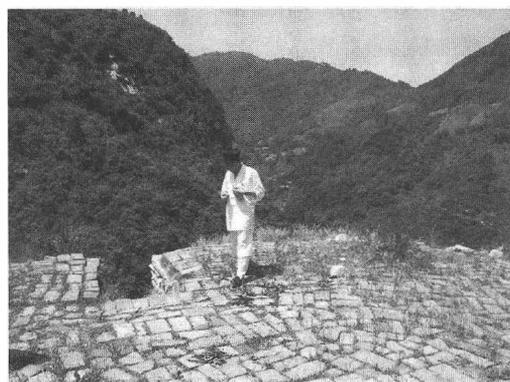


図 26 玄都壇を子午谷から望む (左)

図 27 壇を北側から。

図 28 西側の山上から (右下・燐光春氏提供)

図 29 玄都壇の壇上、西向き (左下)。



ある。ここは南に、今の安康の方へ抜ける古道であった子午道沿いである。

前述のように、ここは漢代の長安城の南北軸線上にあり、北の天齊坑と対照となっている。この地点は、關のように谷口が狭まっているが、玄都壇のあたりは空間が開けており、周囲をなだらかな山が囲んでいる。西側の山だけがせり出しており、せり出した峰の先に玄都壇のある峰が屹立している。この峰の上部は明らかに人工であり、煉瓦を積んで突起させ、円形の台状に整形してある。この壇に登ると、山並みはほぼ同様な高さで周囲をぐるっと囲んでいるように見え、北側だけ山が切れて間隙があり、長安の平野が望める。西側からせり出している峰の北側に溪流があり、玄都壇のわきを通って、子午谷へと流れる。

玄都壇の北側麓、この溪流との間には金仙観という道観が新たに建造された。この道観は、近くの子午道の古道で 1989 年に新羅の留学生たる金可記に関わる磨崖碑が発見されたのを機に建造されることになった（磨崖碑については別稿に譲る）。また、この溪流の上流は西側の山の懐を源とし、その周囲の山腹には修道者が作った祠が複数ある。中には、地元の村人が共同で作った、石造りの洞窟もあり、そのうちの一例を実見したが、神像が祀られていた。現地の話では、山中で修道している者は数十人にのぼるとのことである。

終南山の楼観台も調査すべきであったが、参加者全員が楼観台には本調査以前に調査した経験があったため、検討はそうした以前の調査にひとまず基づくこととし、あまり知られていない老子墓および西楼観台を調査することにした。というのは、以前の調査による知見では、楼観台には洞窟は存在しないように思われるのに対して、樊光春氏の示教によれば、老子墓および西楼観台には洞窟が存在するとのことだからである。

老子墓は楼観台から西に 2～3 キロ（西安から 75 キロ程）の大陵山にある。付近に軍用地があり、道路は比較的よい。我々は道を間違えてあやうく軍用地に入りそうになった。老子墓は川沿いにあり、わきに大陵山から流れてくる滝がある。老子墓は崖の下に土まんじゅうのように作られており、清の畢沅の書になる題額が刻された石板がはめこまれていた。そこから山道を車であがっていくと、大陵山の山頂（海拔 730 メートル）は台状になっており、そこに西楼観台があった。西楼観台はいくつかの殿舎を建築中だった。境内の奥に二つの洞窟があり、左側が吾老洞で、老子の墓とされている。この地の老子墓は『水経注』にも言及があり、古くから老子の墓とされていたから、隋唐時期には老子墓と認識されていたであろう。

つまり、ここには山麓と山上の二カ所に老子墓がある。山中で通じているという含意なのかもしれない。吾老洞の入口から入ると、内部の石室には直下に洞窟が続いている。ハシゴがなければ下りられず、上から見ると、奥は板で封鎖してある。当地の管理者の話では、内部に入るのは危険なので封鎖している

- 図 30 西楼観台の境内
- 図 31 吾老洞の入口
- 図 32 吾老洞の内部



とのこと。内部の深さはわからず、伝説では四川の青羊宮に続いているという。

郷土史家によれば、2.6メートル降りたところに踊り場があり、そこからさらにハシゴで3メートル降りると、もう一カ所踊り場がある。ここは洞窟内が円形のホール状になっており、90人程度が収容できる。ここは黄土で埋められているが、これはもともとこの洞窟に老子の頭骨を容れた石函が伝えられているとされ、それを文革中に保護するために、地元の老人が土を運び入れたという。洞窟はそこからさらに西南方向に続いている。当地の管理委員会によると、考古学者と建築学者による探検隊がかつて1400メートルまで入ったが、枝分かれが多いために遭難を恐れて戻ったという。また、30年前に探検した村人によると、蝋燭などで2500メートルほど入り、地下流水が南から北に流れて池を成しているのを見たという。地下流水を渡ったところで酸欠らしく蝋燭が消えかかったために、そこから戻った。村民たちによると、老子の頭骨を容れた石函は、複雑に枝分かれした洞窟のいずこかに収められていると信じているとのことである^{*12}。老子の頭骨がこの洞窟に納められたという伝承については、吾老洞の洞前に立つ明の万暦4年（1676）の「重修吾老洞殿宇記」に記載が見える。

当地の話では、この洞窟は地震あるいは地殻変動でできたという説もあるようだが、大陵山から山麓の老子墓まで滝があり、内部が複雑に入り組んで地底湖なども存在するようであるから、やはりカルスト地形による洞窟であり、数キロにわたって洞窟が続いているのであろう。

老子の墓というこの地の伝承は南北朝時代からあり、この地の宗教的な重要性と実際の地形・景観からすれば、この地が洞天の一つに数えられた可能性は充分にあるように感じられた。また、大陵山の南の筆架山には竜王洞と薬王洞という洞窟および廟があるそうだが、今回は調査できなかった。

今後、以上の地点に関するより詳細な記述を期したいと思う。

注12…王安泉「老子葬地考—楼观大陵山吾老洞」2010年4月8日、中华老子网《老子故里论老子丛书—探源卷》。